

伝統の枠を超えた和太鼓集団・GOCOO

「和太鼓集団」GOCOO

40以上もの和太鼓を自在に操り、大地のビートを奏でる和太鼓集団、GOCOO。女性7名、男性4名のバチから繰り出される、国境も音楽ジャンルも超えたもの。そしてその中心には、現代のシャーマンとも言えるべき浅野香の存在がある。

PROFILE

GOCOO | ゴクウ

97年結成。リーダーの浅野香氏を中心に、女性7名、男性4名で構成される和太鼓集団。自作のものも含め40台以上の和太鼓を自在に操り、国境も音楽ジャンルも超えた独自のグローバルミュージックを奏でる。そのトランシーな演奏は海外での評価も高く、ヨーロッパツアーなど海外ライブは100本以上。今年5月の国連環境会議ではアジア代表としてオープニングを飾っている。

瞬間にファンを獲得し、 熱狂の渦は海外へも

和太鼓という伝統的なツールを用いながらも、伝統に縛られず、国境も音楽ジャンルも超えたプリミティブなビートを大地にとどろかせるGOCOO(ゴクウ)。ディジュリドゥ奏者のGoRo氏と組むことも多く、彼の奏でる多国籍な楽器と相まって、聴く者を原初の世界の興奮へと引き込んでくれる。テクノトランスで踊り狂っていた若者も、バラードにしっとり聞き入っていた少女も、スタンディングで躍らせる強烈な力を持っているのだ。

97年、ライブハウスではなく野外フェスやライブ(野外音楽パーティ)から活動をスタートし、瞬間にファンを獲得していったGOCOO。海外での評価も高く、ヨーロッパツアーなど海外ライブ本数は100本以上。今年の5月にはドイツで開催された国連環境会議でアジア代表としてオープニングコンサートにも出演している。

舞台の中央では、リーダーの浅野香氏がトレードマークである長い髪を獅子舞のように振り乱しながら、パワフルにパチを振り下ろしている。身長156cmと小柄ながら強烈なオーラを放つ、GOCOOのカリスマ的存在だ。

この人はシャーマンのようだ、と舞台を見るたびに思っていたが、聞けば、GOCOOを始める前、彼女は治療師だったのだという。

治療師としてぶつかった壁。 そして、和太鼓との出会い

「子どもの頃はすごく体が弱かったんですね。あれをしたい、これしたいと欲求はあるのに、体がついてこない。そんなくやしさがありました。

注射も薬も体にあわない。でも経験的にココ



昨年夏の海外ツアーにて。国内直近では、9月27日に舞浜のイクスピアリでライブ予定。

を押すと体がラクになる、と自分でツボを見つけたりしたこと、東洋医学の道に進みました。鍼灸の免許を取って、自然治癒力や食事療法の勉強をし、治療院を開業したんです」

治療院はすぐに軌道に乗り、流行っていたというが、次第に治療の壁も見えてきた。

「その人が人生を精一杯生きられるようにするためのお手伝いをすることが私の仕事だと思っていました。でも、走り出す準備ができていないながらも、本心では治りたくないと思っている人もいます。そうなると、病気だけを診ていては治療はできない。その人と、人として向き合うことが必要になってきます。それには今の自分は力量不足だと感じました。治療だけをしていても、道は遠いなと」

そんなときに会ったのが、和太鼓だった。「知人が、チームを組んでの和太鼓活動とそのための人材育成をやり始めるっていうんで、生徒として声がかかったんですよ。『打ちに来い』って。でも、まったく気が進まなくて。というも、私は音楽をやることにすぐコンプレックスを持っていたんですね。

小学校3年生のときに私立の学校に転校したら、音楽の授業はピアノが弾けて譜面が読めることが大前提。当然ついていけなくて、『音楽って難しい』とインプットされてしまったんです。だから、そのときの太鼓も、断れないからシブシブと……(笑)。

そこには、盆踊りで使うような大きな和太鼓が用意されていました。その太鼓の前に立った瞬間に、私の人生が変わったんです」

「『私、この場所知ってる』と思いました。そこに太鼓があって、打とうとしている、その感覚にもすごく慣れ親しんだものがあって。『どうやって打つんだろう?』なんてまったく考えることもなく、ドンドンドン!と自然に太鼓を打っていました。思い出した、という感覚です。『これだ!! 太鼓が私の手段だ』と思いました。色々あって今ここに帰ってこれたのなら、一生太鼓を打って生きていこう、とその瞬間に決意したんです」

彼女は順調だった治療院を閉め、太鼓に専念した。太鼓を打ったことがなかったとは思えないほどの腕前で、数ヶ月後には教わる側から教える側になってしまう。

太鼓を始めて5年がたった96年、太鼓の世界に誘ってくれた知人が辞めることになり、結成していたバンドも解散した。そこで、彼女が

太鼓道場の主宰を受け継ぎ、道場「TAWOO(タヲ)」を始めると同時に、道場生の中心メンバー13人と「GOCOO」を結成。97年の元日のことだった。

太鼓は祭りを生む プリミティブな楽器

「TAWOOもGOCOOも、一緒に育っていきける場、安心して人とつながることができる場を提供したい、という気持ちでやっています。大人になると、何かに本当に本気になることって難しいじゃないですか。照れくさいし。でも、本気になってさらけだして解放されると、魂が元気になって体も元気になっていく。そして本気は感動を呼び起こす。感動は魂の栄養源なんです。

太鼓は単純な楽器だから、出る音はイコール自分自身。生きて味わうすべてのことが音になります。生きた分の音が出る。人は、外に見せたい顔以外にも色々な顔を持っていますが、太鼓なら、気の弱いところも強いところも、やさしいところも、丸ごとの自分を全部音で出してしまえる。

それに、太鼓は全身運動だから、抑えておけない。自然とあふれてしまうところがある。

道場に入ってきた子が、色々なことにぶつかってへこんだり、悩んだり、でも一方で喜んだり、楽しんだり、泣いたり笑ったりしながらだんだんと解放されていって、ある日スコーンと抜ける。そんな場面に立ち会えることが、本当に嬉しいんです」

そして、GOCOOの活動もTAWOOの活動も、つきつめていくと、“愛”と“感謝”に集約される、と彼女は語る。

「ライブをやっていると、日常の色々が削がれて、魂の中で一番純粹なところ、“愛”と“感謝”だけになる瞬間がある。結局、これが“祭り”なんだろうな、と思います。

新しいものを表現していると言われるけれど、一番新しいものは一番古いものにつながるんじゃないでしょうか。GOCOOのやっていることは、伝統的な和太鼓の演奏スタイルが生まれる以前のプリミティブな祭りの世界。人と神、人と大地、人と人が全部つながっていると感じられる場です」

彼女は、やはりシャーマンだった。パチを操り、祭りを生み出す。「人を妬んだり腹を立てたり、しょうもない自分も、人間だからあって当然だけど、“愛”と“感謝”の純粹な魂に戻って

魂の中で一番純粋なところ、
 ”愛”と”感謝”だけになる瞬間がある。
 結局、これが”祭り”なんだろうな、
 と思います。



いける時間」を私たちに提供してくれている。

太鼓を打ちながら死ねれば本望

人と一緒に打つ場合、お互いに解放されていないといいグルーヴは生まれにくい。

「メンバーには、太鼓だけでなく、デザイナーや会社役員、日本人形師といった別の顔を持ち続けている人もいます。長年太鼓を打っているとそれぞれ突出してくる部分があるから、11人11様の豊かな個性がある。疲れたりぶつかったりすることもあります、それでもお互いがお互いのファンです。この11年、退屈

なんて感じたことがないし、いつまでも互いに興味津々です。私にとって太鼓は1人で打つものじゃなく人と打つもの。だからこのメンバーに出会えたことが私の人生の宝です。

GOCOOのライブでは、11人の間に境はありません。GOCOOというひとつの生き物という感覚。そして、GOCOOは各々にとってライフワークを通り越して人生そのもの。死ぬときに、『自分はGOCOOとして生きた』と思えることが誇りです」

何かひとつのことをやり続けることも、集団行動も実は苦手だったという浅野氏。でも、もはや太鼓のない人生は考えられない。80歳

になったら80歳でしか出せない音があるはず。「太鼓を打ちながら死ねたら本望！」

鬼に金棒、浅野香にバチ。自分の命が輝く場所を知ったシャーマンが奏でる音は、聴く者の心の扉を確実にノックし、呼びかけている。「あなたも自分を解き放ちなさい」と。「本当は知っているんでしょう、愛と感謝である私たち人間の魂を」と。

あなたも、心の扉をノックされに、ぜひステージに足を運んでみて欲しい。

Text by : 平林豊子

DISC



MatsuRhythm vol.1
 『Earth Beat』
 和太鼓を超えていくトライバル・グルーヴ! GOCOO+GoRo 最新アルバム。



『LOVE BEAT!』
 ヨーロッパ限定発売のライブアルバム。2002年東京でのライブ録音。



『LIVE '02』
 2002年12月7日、渋谷ON AIR WESTで行われたライブ映像。



『HOTAKA』
 リアルトランスのカリスマ、ベンワトキンス率いる‘Juno Reactor’が、GOCOOとビリー・アイドルのスーパーギタリスト Steve Stevensをフューチャーし、更なる進化を遂げた必聴盤マキシシングル。

WEB

GOCOO HP
<http://www.gocoo.tv/>

TAWOO HP
<http://www.tawoo.tv/>